



# Transformation of Pension Villages in the Outer Zone of Tokyo Metropolitan Area: A Case Study of Minenohara Kogen, Nagano Prefecture

著者	鈴木 富之
発行年	2015
その他のタイトル	首都圏外縁部におけるペンション集積地域の変容 長野県 峰の原高原を事例として
学位授与大学	筑波大学 (University of Tsukuba)
学位授与年度	2014
報告番号	12102乙第2737号
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00126159">http://hdl.handle.net/2241/00126159</a>

氏名（本籍）	鈴木 富之		
学位の種類	博 士（理学）		
学位記番号	博 乙 第	2737	号
学位授与年月日	平成 27 年 3 月 25 日		
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当		
審査研究科	生命環境科学研究科		
学位論文題目	Transformation of Pension Villages in the Outer Zone of Tokyo Metropolitan Area: A Case Study of Minenohara Kogen, Nagano Prefecture（首都圏外縁部におけるペンション集積地域の変容ー長野県峰の原高原を事例としてー）		
主査	筑波大学教授	Ph.D.	呉羽 正昭
副査	筑波大学教授	理学博士	山下 清海
副査	筑波大学准教授	博士（理学）	堤 純
副査	筑波大学助教	博士（理学）	山下 亜紀郎

## 論 文 の 要 旨

ペンションは、日本のマス・ツーリズム期の後半、1970年頃以降に登場した新しい宿泊施設である。一般には、個人の専業経営による洋風の小規模宿泊施設と性格付けられる。またその開発形態が特異であり、ペンション供給会社や不動産会社などにより一括で開発された場合が多かったために、ペンションは集積地域を形成してきた。日本では、マス・ツーリズム期後半からバブル期まではツーリズムも順調に成長し、この傾向で、ペンション集積地域も発展を示した。しかし、その後はオルタナティブ・ツーリズムの発生・普及とともに、日本におけるツーリズムは多様化し、ペンション集積地区も変化を余儀なくされている。本研究の目的は、日本のツーリズムが新しい局面を迎えていると考えられる最近20年間に、ペンション集積地域がどのように変容しているのかを解明することである。具体的には、ペンション集積地域の地域的展開をとらえ、それらの立地条件と集積プロセスに基づいて、ペンション集積地域を類型化した。そのタイプのなかで、非居住地域に立地する「新観光集落形成型集積地域」の例として長野県峰の原高原について分析した。全てのペンションに対して詳細な聞き取り調査を実施し、ペンションの経営内容や宣伝方法の変遷、宿泊客の量・質変化などの視点からペンション集積地域の変容にみられる諸特徴を明らかにした。またそのような変容をもたらした要因を、ペンション集積地域内外の地域条件をとりあげて考察した。

その結果、第一に、日本においてペンション集積地域は、東京中心部からの近接性の向上、スキー場や景勝地などの観光資源の整備に基づいて、首都圏外縁部に集中して分布していることが示された。同時に、個々のペンション集積地域という地域スケールでみると、周囲の環境に応じて異なった集積プロセスがみられることを指摘した。すなわち、ペンション集積地域の周辺環境が非居住地域、別荘地、観光集落、農業集落の何れかであるかによって、ペンションの集積プロセスが異なっている。

第二に、長野県須坂市に位置する峰の原高原のペンション集積地域は、1970年代前半、長野県企業局による

開発・分譲によって形成された。冬季のスキー客を中心にしてバブル期まで発展を続けていたものの、スキーブームの終焉以降、急激に宿泊客が減少傾向を示し、経営を中止し施設を売却して転居するペンションや、ペンションの看板を下ろしてそのまま居住する例も増えつつある。現存する全てのペンションに対して聞き取り調査を実施し、現在のペンション経営の内容を詳細に分析した。その結果、経営内容の異なるペンションが併存していることが解明された。すなわち、経営者が高齢化して常連客のみを受け入れる「経営縮小型ペンション」、陸上競技団体を積極的に受け入れる「陸上競技合宿導入型ペンション」、経営者と趣味を同じくする宿泊客を受け入れる「趣味重視型ペンション」に分化してきたことを示した。

峰の原高原では、最近約20年間におけるスキー人口の減少にともなって、ペンションの経営内容が大きく変化してきた。その中で、インターネット環境の整備によって個々のペンション経営者の独自性を発信することが容易になったこと、標高が高いという峰の原高原の自然条件が陸上の中長距離競技合宿の場として適していること、オルタナティブ・ツーリズムの発生・普及によって人びとの観光行動が多様化していることなどに基づいて、ペンション集積地域の性格が変容してきた。加えて、ペンションが持つ、旅館やホテル、民宿とは異なる性格が変容に重要な役割を果たしていた。すなわち、宿泊客と経営者との接触時間がより長く、またその結果として心理的な距離がより近く、常連客や趣味を同じくする宿泊客が集まる空間としてペンションが機能していることが示された。

## 審 査 の 要 旨

本研究は、宿泊施設が集積する地域がどのように変容するのかを追究したものである。観光地理学の分野では、バブル期までの時期に、こうした集積地域がどのように発展してきたのかについて多くの研究成果があげられてきた。しかし、バブル崩壊以降の宿泊施設集積地域は衰退傾向を示すことが多く、さらにペンション集積地域自体も研究の対象とされることはほとんどなかった。それに対して、本研究はまず日本全体のスケールで、ペンション集積地域の空間的分析を通じて集積プロセスを解明した。さらに、長野県須坂市に位置する峰の原高原において全てのペンションに聞き取り調査を実施し、ペンション集積地域の変容にみられる特徴を解明した。とくに、ペンション集積地域内に異なった経営内容のペンションが共存するようになったことが示された。この事実は、マス・ツーリズムからオルタナティブ・ツーリズムへと行動パターンが変化する中で、ペンション集積地域内外の諸条件と関係してもたらされた。また、ペンションが持つ宿泊施設としての特性を加味しながら考察したことは、観光学の研究に重要な知見をもたらす成果である。さらに、宿泊施設の経営に着目して、停滞している宿泊施設集積地域の意味を地域的に説明しようとする研究手法は、従来の観光地理学の分野に新たな方法論を加えるものとして高く評価できる。

平成27年2月5日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもとに論文の審査及び学力の確認を行い、本論文について著者に説明を求め、関連事項について質疑応答を行った。その結果、審査委員全員によって合格と判定された。

よって、著者は博士（理学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものとして認める。